

スペインの庭(1)

鳥 居 徳 敏

はじめに

スペインの庭と言えば、まずはパティオ（中庭）を思い描くことであろう。殊にスペイン南部のアンダルシアのパティオ(図1)は有名であり、旅行ガイドブックの紙面を飾り、観光ツアーの目玉の一つにもなっている。しかし、パティオはスペイン南部だけでなく、同国全土に限なく見られる半屋外空間であるのみならず、ヨーロッパ、中近東、およびアフリカの地中海沿岸地域に見られる特徴でもある。それをコアとするパティオ型住宅は、極めて古い住宅形式の一つであり、古代メソポタミアのウルの住居跡(BC2000年、図2)や古代ギリシアのデロス島住居跡(BC 2 - 3 世紀、図3)でも典型的な住宅形式として知られている¹。



図1 セビーリヤ、ある住宅
パティオ【著者撮影】

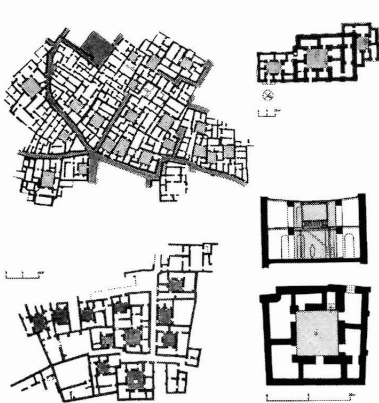


図2 ウル、パティオ型住居と住街区
【『都市の世界史1、古代』 23頁】

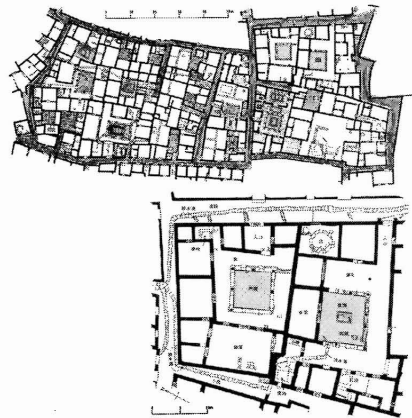


図3 デロス島、パティオ型住居と住街区
【『都市の世界史1、古代』96-97頁】

古代ローマ帝国時代の地中海沿岸地域の住宅もこのパティオ形式を典型とし、その後、中近東から同地域に支配権を広めたイスラム圏の住宅も同形式を採用した。例えば、モロッコの首都マラケシュ（図4）はこのパティオ型住宅が際限なく広がる巨大な低層都市であり、その航空写真は圧巻であり、異様でもあろう。



図4 マラケシュ（モロッコ）、航空写真

住宅の最低目標は、外敵、および自然の脅威から身を守ることにある。後者には風雨や寒暑から身を守ることも含まれる。住宅に厚い外壁は不可欠であり、また住宅が集約する都市には城壁（市壁）が必要になるのはこのためである。日本のような島国では海が外敵侵入の自然の障壁になるため、市壁の発展は見られない。しかし、地続きの大陸での市壁は身の安全を守るためになくてはならない存在であり、それ故、市壁はその都市の独立性を表す象徴にもなった。

窓などの開口部がなく、厚い外壁に囲まれた住宅はより一層安全であろう。しかし、これでは明かりや新鮮な外気を室内に取り込むことができず、生活には不便になろう。中庭を設け、そこから外気を取り入れ、間接光で室内を明るくすれば、問題は解決する。特に、日差しが強く、酷暑の地域では、直射光は禁物で、間接光は最善の手段であろう。

日本の伝統的な家屋は「夏を旨」とし、北から南へ風を通すようにしなければならない。これは高温多湿を特徴とする熱帯モンスーンや温暖湿潤地帯での原則であろう。外壁に開口部を設け、風通しを良くすれば、外敵の侵入を容易にして

安全ではない。この矛盾を解決する方法が外堀の設置である。公家や武家の屋敷は外堀で囲まれているから、住宅それ自身は開放的な構造にできる。開放的にした上で、裏庭に竹林を作り、表庭に池でもあしえれば、通り風はより一層涼しげになろう。しかし、一般大衆の住宅ではそうはいかない。貧民は暑さに耐え身の安全を図るしかない。

地中海や中近東のように乾燥した酷暑の地域では昼夜の温度差がはなはだしい。昼は暑すぎて身動き一つできない状態になるにもかかわらず、朝夕は結構涼しく快適である。特に日中の照り返しが強いため、地上近くの空気は熱風となり、その熱風を室内に取り込めば最悪の状態になろう。しかし、パティオからの空気は屋根越しから入る空気であるから、街路の熱風に比べれば、いくらかは過ごし易い。ただし、40度を超える真夏は人の許容度を超える。クーラーのない時代、この時期の唯一の防御策は、早朝の涼しい空気を室内に取り込み、開口部という開口部を閉め切り、外気の侵入を防いだ上で、ベッドにまんじりともせずじっとしていること。これが、スペイン南部にシエスタという昼寝の習慣を生んだ。涼しくなる夕刻、人々は活動を再開し、街中は賑わう。スペイン人は一日に二日持つと云われる所以である。

イスラム都市の特徴は、幾重もの市壁に囲まれていることに見られる。王宮はその市街区に接しながらも、その内部ではなく、外部に設けられ、自身の城壁を持つ。反乱が起きたとき、いつでも容易に外部に避難できるからだ。市街区は市壁により幾つもの街区に分かれる。というよりも、市壁に囲まれた旧市街区に新たな街区が追加され、都市は増幅・反復しながら拡大してきた(図5)。最少単位

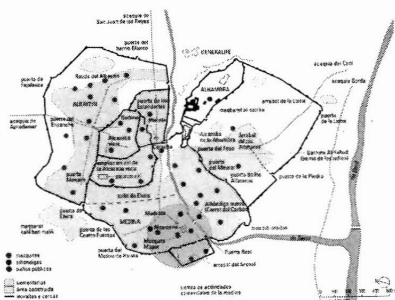


図5 グラナダ、イスラム時代の街区とその市壁

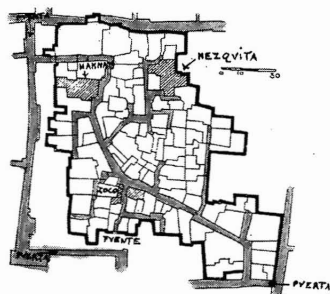


図6 ダマスカス（シリア）、ある街区の平面【Sauvagetによる】

街区は一本の袋小路に幾つもの家屋が接続し、その袋小路入口は門により外部と隔離される(図6)。ある意味で、連続した住宅の外壁が住区壁を形成し、最少の単位街区を形作る。袋小路は最小幅の狭い通りであり、それに面する住宅外壁には開口部はなく、あるとしても、高い位置に小さな窓が見られる程度であろう。しかし、各戸の玄関に入れば、先ずパティオに通じるから、視界が広がり、明るい空間が見られる。そのパティオを中心コアとして居間・食堂、寝室などの諸室に導かれる。それぞれの社会的地位や経済力により、パティオの数や規模は変わり、それらをあしらう水や緑の様子も多様に変化する。

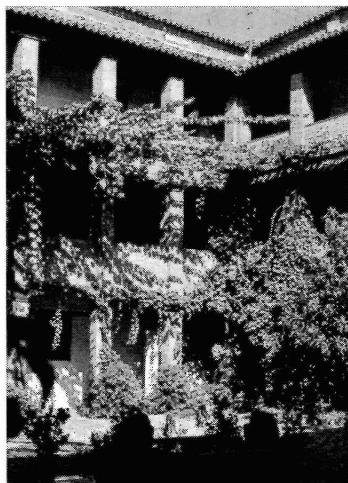


図7 グラナダ、コラル・デル・カルボン、14世紀【著者撮影】



図8 バルセロナ、拡張地区【Triangle Postals】

したがって、スペインのパティオは地中海沿岸地域に共通する中庭形式であり、それは有史以前から存在し、古代のギリシアやローマの住宅形式として一般化しており、イスラム勃興後は同文化圏の典型として見られることから、二重・三重の意味でスペインに定着すべくして定着した庭園形式と見なすことができる。

ただし、パティオ Patio の語源としては、フランス南部の古語オック語の「共有牧草地」とか、「荒地地」とかを意味する *patu*, *pati* の可能性が指摘されており、これはラテン語 *pactio*, *pactus* (協定、賃貸契約) に由来し、これから「賃貸牧草地」、さらには「荒地地」に転じ、「建物の背後や内部の空き地」を意味するようになった²。しかし、スペイン語(＝カスティーリャ語)では、スペインの

3言語（同上、カタルーニャ語、およびガリシア語）とオック語に共通するコラルcorral（「家畜を戦わせたり、囲み込んだりする場所」、もしくは「家屋の傍、または内部の囲われた屋外」）がパティオに代わる言葉として使用されてきており、後者パティオの出現は遅れた。例えば、コラル（マドリードでは女性名詞のコララ corrala を使用）はすべての住戸が中庭に面する集合住宅の典型的な形式を指し、首都では16世紀以来の伝統的な住居形式として定着し、19世紀にその最盛期を迎えた³。同形式の集合住宅はセビーリャにも多数残され⁴、グラナダにはイスラム時代の14世紀に建設されたコラル・デル・カルボン（石炭のコラル、図7）という穀物取引所の遺構が見られる。この3階建ての取引所も大きな中庭に面した建物であり、上階の部屋は宿舎に想定されている。また、1860年に認可されたバルセロナの都市拡張計画「サルダー計画案」の基本でも、グリッド状に区画された各正方形街区は四周のビルで中央の中庭を囲む形式を取り、拡張地区全体がパティオ形式の街区で構成されている印象を与える（図8）。すなわち、スペインでは戸建て住宅のみならず、集合住宅から都市を構成する街区組成においても、パティオという形式が基本であろうと想定できるのである。

本論はこのスペインに典型的な庭園形式であるパティオをイスラム時代の王宮建築を事例として、その変遷を明らかにしようとするものである。イベリア半島へのイスラム侵入が711年、スペイン最後のイスラム王国、グラナダのナサリ王朝の滅亡が1492年であるから、中世の約8世紀間の変遷を扱うことになる。またイスラム王権の一般的な特徴は先代の王宮を放棄したり、取り壊したりして新宮殿を建設することに見られ、この結果、中世のイスラムの遺構は世界的に極めて少なく、スペインのそれは例外であり、極めて重要な遺産になつてもある。したがって、この研究はイスラムにかかわる研究においても貴重な事例を紹介することにもなる。

本論に入る前にテーマと密接に関係する3用語、すなわち「ウエルトhuerto」、「ハルディンjardin」、および「パティオ」を整理する必要がある。後者は上述したから、省略するとして、ウエルトはラテン語 hortus 一庭（園）、複数形で公園— を語源とし、「小面積の、一般的には壁に囲まれた野菜園、時には果樹園」を意味する。女性名詞のウエルタ huerta は「ウエルトよりも大規模の野菜・果樹園」、または「灌漑農地」を意味する。ハルディンは同じラテン語 hortus 起源

の古フランス語 *jart* の縮小辞 *jardin* に由来する。したがって、「庭（園）」と邦訳される「ハルディン」は、語源的には「小さなウエルト」を意味し、現在では「装飾を目的として植物を栽培する土地」として説明されている。この後者の厳格な意味を理解するならば、「パティオの中に庭が存在すること」が理解されよう。なぜなら、パティオは四周を囲まれた屋外を意味するだけで、そこでの植物栽培とは関係せず、ハルディンは装飾目的の植物栽培の土地を意味するからだ。例えば、大理石やタイル床張りのパティオの一角に植物を栽培する場所があれば、後者はハルディン（庭）と呼ばれることになるだろう。これは日本語での「庭」と「中庭」との関係に対応しない。なぜなら、日本語の「庭」は空間を指し、植物がある場合も、ない場合もあり得るからだ。また「中庭」は空間としての「パティオ」と同意語であり、両者とも植物等の栽培とは無関係である。すなわち、ハルディンの邦訳に「庭」は必ずしも適切ではないということになるだろう。本論文タイトルの「庭」は日本語の庭を意味し、スペイン語のハルディンの訳語ではない。また、ウエルトには本論文では「野菜園」ではなく、「果樹園」の訳語を当てる。なぜなら、王宮庭園としての「野菜園」は本論文での事例では想定し難いからである。

1. コルドバの後ウマイヤ朝モスク

スペイン・イスラムの最古のモニュメント、かつ全イスラム世界においてももっとも貴重な建築遺産の一つが、後ウマイヤ朝の首都コルドバのメスキータ・マヨール大モスクであり、780年に着工され、その後3度の拡張により今日の規模になる（第一期、780-86年；第二期、833年；第三期、961-69年；第四期、987-90年、図9）。キリスト教徒による再征服後はモスク内にゴシックとルネサンスの二つの大聖堂が挿入され、今日に至っている（図11）。モスクの原型は

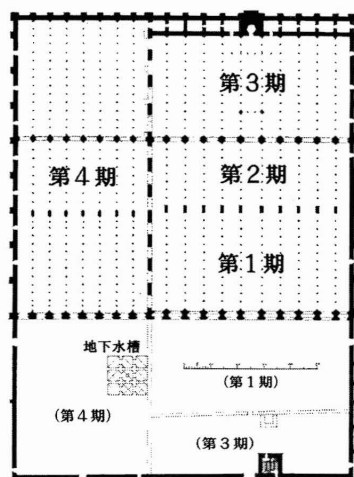


図9 コルドバ、大モスク、平面図
【Torres Balbasによる】

メディナのムハンマドの自邸とされ、それはパティオを中心に南北に広間、西側に居住部が配されるものであった(図10)。前者南側広間の南側の壁がメッカの方向にあたり、この方向への礼拝が定式化され、この広間が礼拝堂とされた。コルドバの大モスクも、この例に従い、パティオ南側に礼拝堂、残る3方に回廊が配されている。ただし、スペインの場合、南側にメッカが位置するわけではない。このパティオも礼拝堂部の増築に伴い拡張されているが、スペインではもっとも古い庭の一つとされている。

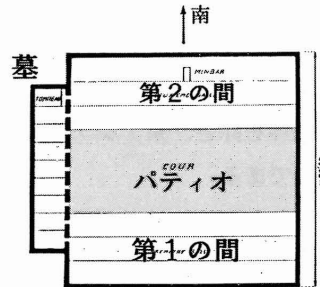


図10 ムハンマドの家、平面図【abd-Allah ibn Jazid による】

ブルックスによると、このパティオ(図12)は、1. 現存するヨーロッパ最古の庭園、2. オレンジの木は灌漑水路により整然と秩序つけられている、3. グリッド・プランに果樹を植えるという中東に一般的な方法を都市内で演じた早い例、と言う⁵。セビーリヤの大聖堂に併設されているパティオも「オレンジのパティオ」と命名され、かつてはムワッヒド朝時代に建設された大モスクのパティオであり、同大聖堂の鍾塔「ヒラルダの塔」も同モスクのミナレットで、その最上部はキリスト教徒によりルネサンス期に増築されたものであった。そして、大聖堂は同モ

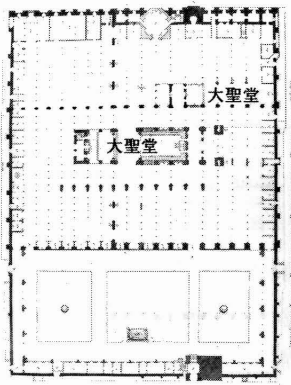


図11 コルドバ、大モスク、1767年
平面図【J.P.Arnalによる】



図12 コルドバ、大モスク、パティオ【著者撮影】

スクの礼拝堂部を取壊し、新築されたものである。したがって、スペインでは「オレンジのパティオ」と言うと、モスクのパティオという印象を与える。ただし、モスクのパティオを植栽することはイスラム世界の伝統ではなかった。シリアの一部の例外を除き、東アジアやエジプトなどのモスクのパティオには植栽は見られないのである。

しかしながら、コルドバの大モスクの場合、創建当初からパティオには植樹があったと推測される。なぜなら、アブド・アッラフマーン1世(756-788)の時代、植樹がイスラム法に照らし合法であるかの論議がなされているからだ。それから2世紀後の976年、アル・ハーカム2世(961-76)が山からの用水路を建設し、その水を供給源とする洗浄室4つ(東西に男女1つずつの2組)がパティオに設置される。それまでは動物を動力とするノリア(水車)により水が水盤に供給されていたから、その水源は地下水の井戸水であった。パティオの一角に地下水層が建設されるのは第四期拡張工事の10世紀末であり、正方形9区画よりなるその規模は $14.5 \times 14.5 \times$ 高さ 5.57m に過ぎなかった(図9)。またキリスト教徒により再征服される13世紀になり、同パティオに椰子が高々とおい茂っていたとする記述が出現する⁶。したがって、ブルックスによる灌漑水路に従ったオレンジの配置という推測は根拠に欠くものであり、また同樹木の基盤目の配置が中東の伝統によるとする指摘も必ずしも根拠のある論述とは言えない。

いずれにしても、礼拝前の洗浄を主たる目的としたパティオを起源としながらも、中東では見られない植樹されたパティオはスペイン・イスラム文化独自の庭であったと想定することができよう。

2. マディナート・アル=サフラ、10世紀

後ウマイヤ朝初代カリフ、アブド・アッラフマーン3世(911-61)はカリフとしての権威を誇示することを目的に、コルドバの西方約5kmに新しい宮廷都市マディナート・アル=サフラを936年に着工させる。945年には宮廷が遷都するものの、造幣局は948年まで移転できず、都市建設は息子ハーカム2世により976年に完成した。ただし、多くの部分は初代カリフの崩御するかなり以前に完成していた。規模は $1518 \times 745\text{m}$ 、約 113ha と広大であったが、同王朝末期の1010年、内戦により略奪・破壊が始まり、同世紀末には創建当初の豪壮な面影は残らず廃

墟と化した。土に埋もれたこの宮廷都市の発掘調査は1854年に着手されるが、直ぐに中断され、1911年に正式に再開した。しかし、その全貌は未だ明らかにならず、今日に至るまで発掘は続いている⁷。

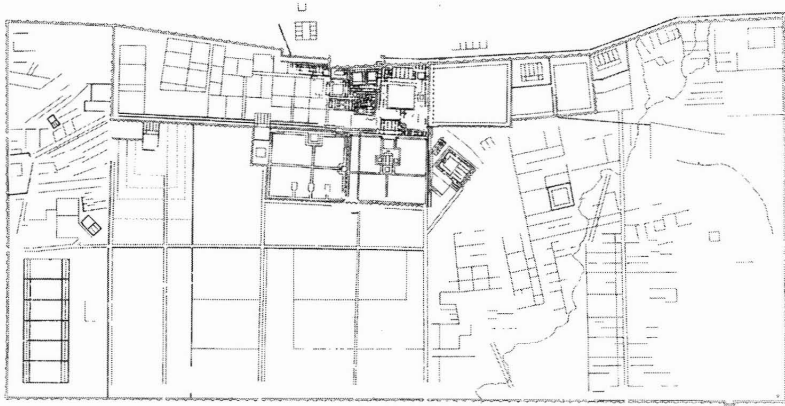


図13 マディナート・アル=サフラ、全域平面図【Anotnio Almagroによる】

発掘作業は全体の10%程度しか進んでいないものの、王宮主要部やジャーミー・モスクのみならず、宮廷前の庭園部も明らかになりつつある。マディナート・アル=サフラ(図13)は短辺南北方向の傾斜地で、三つのテラスが階段状に広がった都市であり、北側のもっとも高い場所に配された王宮部は、すぐ前の庭園部により、南側都市部と分割され、それぞれは独自の城壁をもって区画されていた。王宮部の床面を南側建造物の屋根よりも高くすることにより、手前の庭園越しに広がる眺望を享受できるように計画されている。

現在、宮殿前の庭園が二つ判明している(図14)。それぞれ、田の字型に道が交差する四分庭園であり、縦軸に相当する中央南北路の北側にサロン棟(東側の棟屋は発掘当初から「豪華サロンSalón Rico」(B)として知られており、西側のそれは単に「西側サロン」、あるいは発掘した女性館長に因み「セニョリータのサロン」(D)とか呼ばれる)が配され、その前に池が設けられる。西側四分庭園の横軸東西路端部には泉が見つかった。東側四分庭園では中央部北側にもう一つのサロン棟「南側サロン」(C)が建設され、その東西南北の四面に小さな池を設置し、この地の酷暑に耐え得る環境デザインが見られる。植栽部は舗装されたテラス部床面よりも低く計画され、階段により両者は結合される。こうした通路部

と植栽部で高低差の異なる例はスペイン・イスラム庭園での初出となろう⁸。

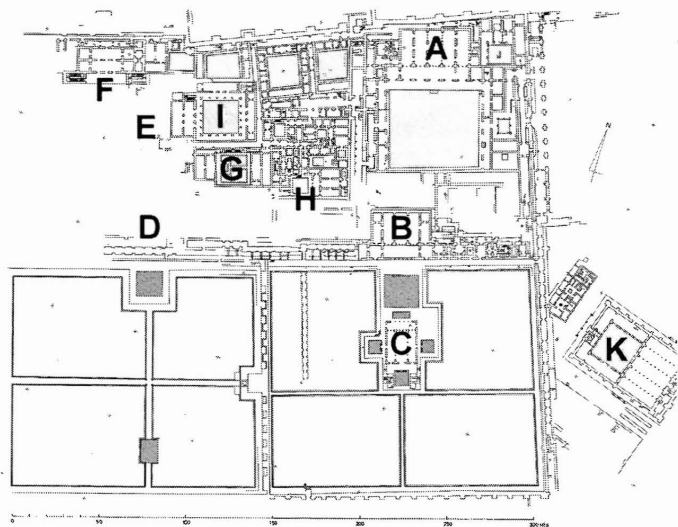


図14 マディナート・アル=サフラ、宮殿部平面図【Anotnio Almagroによる】



図15 マディナート・アル=サフラ、宮殿部上空写真

四分庭園 chabar-bagh はペルシアを起源とする庭園とされ、その最古の先例としてはパサルガダエ（イラン南部）にアケメネス朝キュロス2世により建設された宮殿の庭園（前6世紀頃、図16）が知られている。また、同地イスラム時代の9世紀に建設されたサーマッラーのバルクワラー宮殿庭園（図17）も四分庭園であった⁹。750年ウマイヤ朝政権が滅び、アッバース朝が樹立すると、首都はシリアのダマスカスから現イラクのバクダードに遷都する。これはイスラム政権が

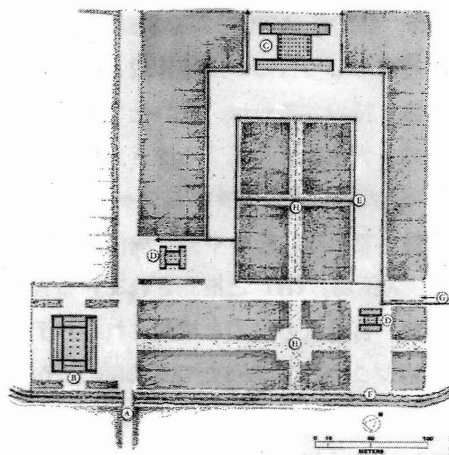


図16 パサルガダエ（イラン南部）、
王宮庭園、前6世紀頃

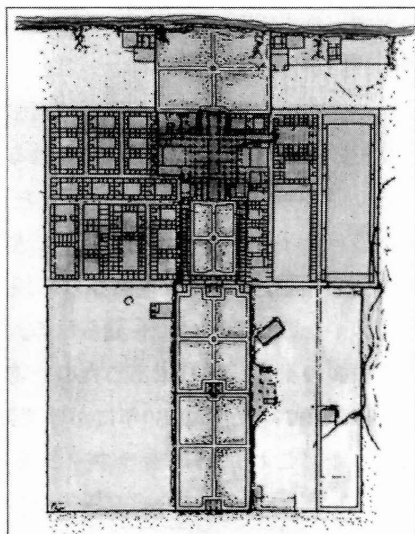


図17 サーマッラー、バルクワ
ラー宮殿庭園、9世紀

ペルシアの強い影響下に入ったことを意味し、四分庭園はイスラム庭園形式の雛型の一つとして定着する。マディナート・アル=サフラの建設に際してはコンスタンティノープルとバクダードから多数の建築家や工匠たちを呼び寄せていることを含め¹⁰、こうした東方との密接な関係により四分庭園がこの宮廷都市に導入され、ここからスペイン・イスラム圏に伝播したことになる。スペインではこの庭園形式を「十字路パティオ patio del crucero」と言い、建物や外壁で囲まれる庭園として一般化する。

マディナート・アル=サフラの十字路庭園の場合、「豪華サロン」(B)の前に池

を配し、その水面に建築を映し出す手法や、あるいは周辺の植栽部庭園の床面を下げテラス部を高くし、後者に池や水路を巡らす手法など、後のスペイン・イスラム庭園の諸特徴が出現する。

宮殿部は前記したメソポタミアや地中海の伝統に従い、パティオを中心に構成される。これらのパティオは植栽された庭園部を持たず、専ら大理石を敷きつめ舗装されていた。例えば、現在知られている宮殿部最大のパティオ（49.30×52.90m）は東側十字路庭園サロン棟「豪華サロン」（B）の北側に位置し、5身廊の大ホール「ダル・アル＝ユンド Dār al-Īund」（図14-A）（内寸法38.88×20.02m、浮彫装飾がほとんど見られないことから、行政もしくは軍の関連施設と推測される）に面する広場であり、総大理石張りの床を持つ。これは、ソロモン王がシバの女王のために建設したと伝えられる宮殿の、大水面を表現する磨き大理石床の伝統で従うものとも言われる¹¹。また、十字路庭園東側に位置するジャーミー・モスクのパティオ（K）もワイン色の大理石張りであり、その中央に洗浄用の泉があった¹²。同じ色の総大理石張りの舗装は「大臣邸」（H）と推測されている官邸部のメインのパティオにも見られる。その他、宮廷人の住宅と推測されるパティオは表面の粗い石張りであったり、あるいはレンガ床であったりする¹³。しかしながら、1977年から1980年にかけて発掘・修復された新しいタイプのパティオが出現した。これは修復者ラファエル・マンサーノにより「小^{アルベルキーリヤ}池のパティオ Patio de la Alberquilla」（G）と命名される¹⁴。

この「小池のパティオ」（図18-G）—前記した「大臣邸」の一角を形成し、くつろぎの空間であったと想定される—は、スペイン・イスラム建築で初出の、長軸の東西面に三連アーチのアーケードで構成された柱廊を持ち、西側に小池を配し、長軸中央路を挟み南北に二つの植栽部の庭園を持つ（図19-20）。中央路両側には後者庭園の縁に沿って小さな水路が切られている。おそらく、庭園植栽のやり水用であったであろう。対面する二面に柱廊を持つパティオ形式は、東方のササン朝ペルシア末期のカスル・アル＝シリノ Oasr al-Sirin（590-628）にその先例が見出され、アッバース朝のウジャイディル Ujaydir 宮城（8世紀中頃）とか、9世紀末のフスタート Fustat にも継承される。そして、スペインではアルハンブラのコマーレスのパティオで最高の作例に達する。

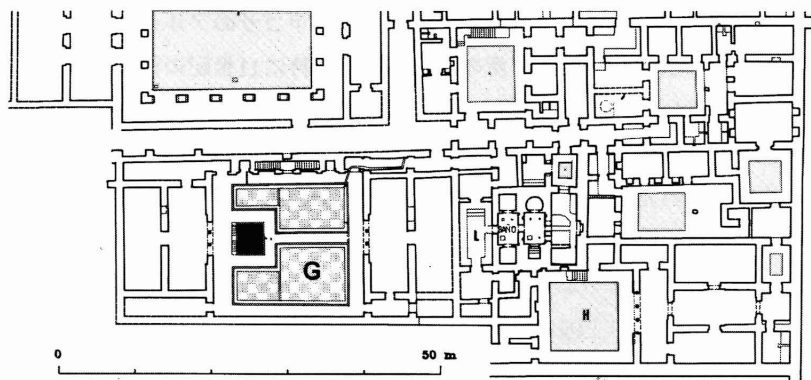


図18 マディナート・アル=サフラ、小池のパティオ (G) 【Anotnio Almagroによる】

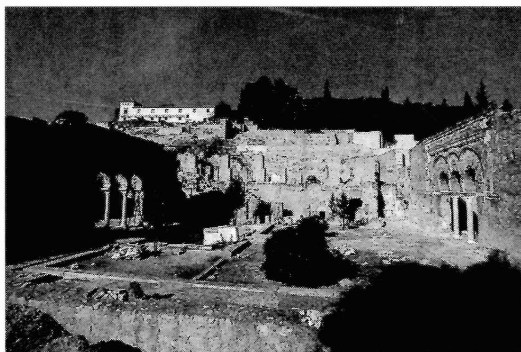


図19 マディナート・アル=サフラ、小池のパティオ

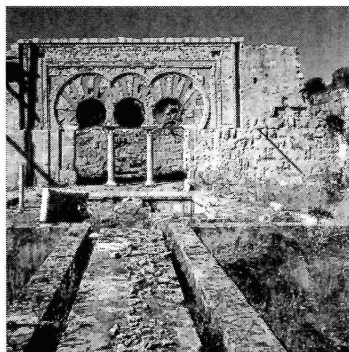


図20 マディナート・アル=サフラ、小池のパティオ、西面

3. サラゴサ、アルハフェリア宮殿、11世紀

1035年、後ウマイヤ朝が崩壊すると、スペイン・イスラム世界は群雄割拠する小国に分裂し、政情不安定な時代に入った。その小国の一つ、サラゴサ王国バヌ・フド朝（1039-1110）がマドリードとバルセロナの間に位置する現サラゴサ県に出現する。イベリア半島北部にありながらも、最もイスラム化された地域の一つであり、再征服後もイスラム教徒のムデハル―キリスト教圏に住むイスラム教徒を指し、「納税者」を意味する―たちが多数住み続けた結果、イスラムの伝統を色濃く残す地域である。その例証の一つがムデハルの建築であり、この系列の作

品群が世界遺産に登録されている。王国の主都サラゴサのアルハフェリア宮殿はイスラム時代の数少ない建築遺産の一つであり、特に11世紀の作例としての希少価値は極めて高い。今日知られている宮殿はアル=ムクタディル王（1044-82）により再建されたものであり、再征服後はキリスト教徒の増改築や現代の改造でかなりの損傷を受けた、19世紀半ば以来兵舎にも転用されていたが、現在では大々的な復元・修復や再建が図られ、州議会本部になっている¹⁵。

「歓喜の宮殿、黄金のサロンよ。そなたたちのおかげで、私の最高の望みを達することができた。我が王国が取るに足らないとしても、これは私に望みうるすべてである」、とアル=ムクタディル王は宮殿を讃美した。「アルハフェリア」と言う名称は同王の名前を取り、「ハファルChafar の館」を意味する。

周囲を16本の円塔で固められた宮殿全体の平面規模は約80×65mであり、東西方向に三分割された中央区画のみに必要諸室が建築された。南北方向の奥行き50m、幅24mの中央区画は「サンタ・イサベルのパティオ」と現在命名されているが、1991年以降の発掘調査により、図21のようなイスラム時代の平面形が判明した。

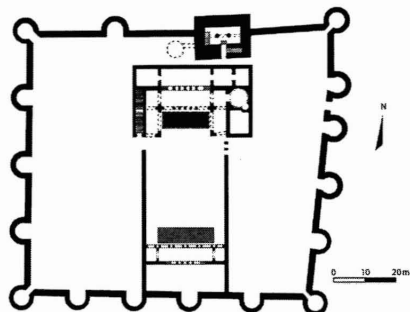


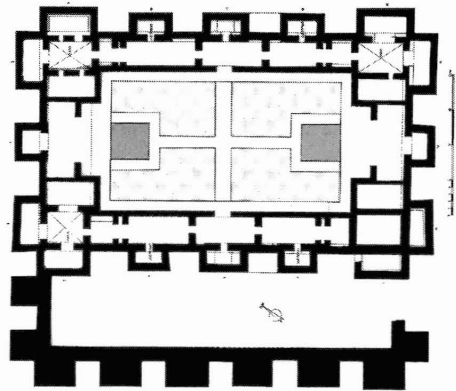
図21 サラゴサ、アルハフェリア宮殿、平面図

中央の長方形パティオを中心にして、南北に池を配し、池越しにアーケードと前廊が続き、北側では両端にアルコーバ（寝室）を持つホールに達する。前廊東側にはモスクがあり、池の東西面にも前廊が回り込み、池の三方向を取り囲む。南側の池は相当に深く、貯水槽の役割を担ったと推測される。このアーケード前に池を配するシステムは前項の「小池のパティオ」と関連付けることができるであろう。ただし、パティオが十字路を形成していたのか、あるいは南北の池を結ぶ通路のみであったのかは判明していない¹⁶。

4. ムルシア王国パティオ、12-13世紀

スペイン・イスラム世界が小王国に分裂した弱体期、モロッコに勃興したム

ラービト朝がイベリア半島に侵入し、イスラム世界を統合（1086－1145）する。このムラービト朝を倒し、同じモロッコに新王朝を樹立したムワッヒド朝もスペインに入り、その首都をセビーリャ（1145－1223）に置いた。この前者から後者王朝への推移期、旧ムルシア王国と旧バレンシア王国、および部分的には現クエンカ県、テルエル県、アルメリア県までを領有したマルダニス王国が独立し、首都をムルシア（1147-72）に定めた。その王イブン・サッド・イブン・マルダニス（1172年没）はキリスト教徒側からロボ王と呼ばれ、ムワッヒド朝の侵攻に対し25年間抵抗したことで知られる。アルフォンソ7世（1126-57）の家臣にもなったこの王はキリスト教諸王国との和平協定をするのみならず、同教徒の傭兵をも使い、セビーリャのムラービト朝に敵対した。そのため、イブン・マルダニスは多数の砦を築き後者の侵攻に対処する必要があった。その一つがモンテアグード城であり、隣接の『カスティリェーホ』城塞、アラブ名のカスル・イブン・サッド（イブン・サッド宮）も同様の目的で建設された、と推測されている¹⁷。



この城塞（図22、平面規模 61 × 38m）は廃墟と化しているも
図22 モンテアグード(ムルシア)、カスティリェーホ【Julio Navarroによる】

の、スペインの後ウマイヤ朝からグラナダ王国へのイスラム宮殿の変遷を知る上でもう一つの貴重な資料を提供する。長方形パティオ（約33×18m）を中心に構成され、短辺側に小池を配した十字路パティオであり、見方を変えると、前記したマディナート・アル＝サフラの「小池のパティオ」を左右反転して併置した構成を取る。小池に面してセットバックした壁面開口部の配置からは、コルドバ同様、開口部に三連アーチのアーケードの存在が推測される。このアーケードの柱廊、もしくは広間に面し、壁面中央に展望小間（約5.5×3.5m）が設置される。玉座が想定されそうなこの小間は後のアルハンブラ宮殿で発展されるものであろうし、その前例は前記「小池のパティオ」の構成に見られる。また、十字路交差

部中央に噴水の跡があり、その場所から延びる配管を通して両側の小池に水が注がれる。

最初（1934）、トーレス・バルバスは『カスティリェーホ』をアルハンブラの「ライオンのパティオ」の先例と見なし、回廊が四周を走り、小池の部分は池ではなく、小殿と推測した。また、四分割された植栽庭園部は十字路舗装面および回廊床面よりも1.4m（後に1mほどに変更）下がる、と記した¹⁸。しかし、1951年のゴメス・モレーノの見解¹⁹を受け、小殿を小池に変更し、パティオ周辺の通路の幅がわずか1.2mであることから、アーケード回廊の存在も否定する²⁰。同形式の十字路パティオはモロッコの首都マラケシュで発掘されたムラービト朝王宮（アリ・イブン・ユスフ王により1131年着工）にも見られる。ただし、スペイン側からの影響か、あるいは逆なのか、さらには直接東方からの影響によるものかは明らかにされていない。

また、イブン・マルダニスが首都としたムルシアでも同王の建設になるダル・アス＝スグラDar as-Sugra（「小邸」）宮の存在が明らかになった。これは1987年以來のサンタ・クララ・ラ・レアル修道院内で現地表面より4.5mの深さに発掘されたもので、1145年の記述に出現する同王の上記宮殿と判明した。宮殿は南北に配した約130m²の大きな長方形パティオを中心に構成され、そのパティオは短辺側に2つの池、さらに中心の交差部に一辺5.7mの正方形小殿を持つ十字路パティオであった。この小殿内には、十字路に切られた4つの水路が交わって生まれる小さな池があった。

前述したように、「庭園のなかの庭園」を意味するペルシア語のチャハル・バグは「四分庭園」であり、この十字路庭園の運河の切られた十字路の交差する中心には小殿や池などを設け、その中心性が強調された。古代ペルシア人たちはこの庭園に「水」、「火」、「風」、そして「地」の神聖な四大要素よりなる宇宙の表現を見、宇宙である「樂園」の象徴としたのである²¹。この伝統を受けたのが旧約聖書の世界であろう。旧約聖書では、樂園であるエデンの園には一つの川から4つの川、すなわちピション、ギボン、チグリス、そしてユーフラテスが生まれ、また樂園の中心には「命の木」と「善悪の知識の木」があったと記される（「創世記」Ⅱ、9-14）。また旧約聖書を受けるコーランでは、「樂園の4大河」として、「水」、「乳」、「葡萄酒」、そして「蜂蜜」の川が記されてもいる²²。ペルシアの伝

統を受け継いだイスラム世界では、前者の「^{パラダイス}楽園」から庭園を生み、「四分庭園」のチャハル・バークを庭園の雛型にした。なぜなら、イスラムでは「楽園」は宇宙の象徴的な表現であり、その宇宙は直角に交わる2つの運河により4分割され、運河の交差点には噴水、もしくは小^{パビリオン}殿が置かれる。これは宇宙の中心にあるとされる山を象徴するからだ²³。

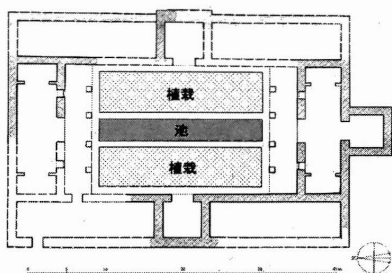


図23 ムルシア、アルカセル・セギル【Julio Navarroによる】

したがって、ムルシアで発掘されたダル・アス＝スグラ宮ではイスラムに典型的なパラダイス（楽園）の表現を見ることがなろう。

しかし、サンタ・クララ・ラ・レアル修道院はこのダル・アス＝スグラ宮ではなく、アルカセル・セギル Alcacer Seguir

(Al-Qasr al-Sagir, 「セギル城」)の廃墟に建設されたものであった。後者はムワッヒド朝末期の小国ムルシアのイスラム王イブン・フド・アル＝ムタワキル Ibn Hud al-Mutawakil (1228-38) の時代に再建されたものであり、前者の地層より1.5m程上で発掘された。この13世紀に再建された王宮のパティオ(図23)は、南北方向に延びた長方形であり、その軸に沿って長い池が配され、両側に植栽庭園があったとナバーロ・パラソンは推定する。短辺の南北にはアーケード、前廊、および両端にアルコーバ(寝室)を持つホールで構成され、南棟には、さらに、正方形の玉座らしきものが見られる。ただし、東西の棟屋中央にも正方形の部屋があることから、ポソ・マルティネスは十字路パティオであった可能性も示唆する²⁴。

中央に細長い池を配するパティオは同じ13世紀に建国されるグラナダ王国の庭園で頻繁に見られる形式として定着する。その代表例がアルハンブラ宮殿の「コマーレスのパティオ」であり、別名「アラヤーネス(銀梅花)のパティオ」、あるいは「アルベルカ(池)のパティオ」とも呼ぶ。

4. コルドバ、キリスト教徒新王宮、1328年着工

コルドバは1236年フェルナンド3世聖王（1217-52）により再征服され、キリスト教徒の街となる。少し時代が下るが、これより約90年後の1328年、アルフォンソ11世（1312-49）により新王宮Alcazar Realの建設が着工された。この当時建設されたパティオが前項の『カスティリェーホ』に極めて類似した十字路パティオであったことは、注目に値する。年代的には次項で述べるセビーリャ王宮のパティオより遅い出現だが、余りにも類似していることから、このパティオを先に扱うことにする(図24-25)。

この十字路パティオの平面規模は $37.8 \times 24.2\text{m}$ と『カスティリェーホ』のパティオよりも広いが、小池の大きさ $5.7 \times 3.3\text{m}$ と $5.3 \times 4.5\text{m}$ は後者の規模約 $5.2 \times 5.5\text{m}$ よりも小さい。円形の噴水が十字路交差部のセンター他、長軸先端部に一つずつの計3個設置され、後者の水は大理石床に切られた細い水路を通り小池に注がれる。この小池に面して両側にアルコーバ（寝室）を持つ長方形の広間（ $20.6 \times 3.85\text{m}$ ）があり、その前と小池の間に柱廊の存在が推測される。十字路と長軸両側の通路には陶板が敷かれ、四つの植栽部庭園との境にはタイル製の水路が走る。これら植栽部の床面が通路面からどの程度下がっていたかは定かでない²⁵。

このコルドバの十字路パティオは、キリスト教徒により建設されたものとはいえ、場所的にはイスラムの伝統が根強く、またイスラム教徒のムデハル職人の手になっ

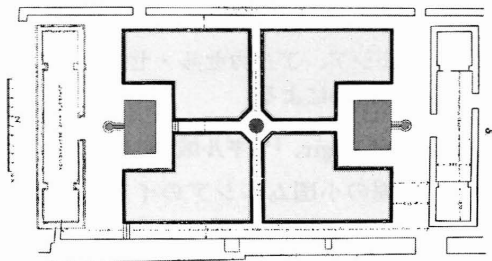


図24 コルドバ、新王宮、十字路パティオ



図25 コルドバ、新王宮、十字路パティオ

たであろうことは大いに推測できることでもあるから、ある意味で同時代・同地域アンダルシアのイスラム世界、すなわちグラナダ王国のパティオと類縁関係にあるのは否定できないであろう。少なくとも、このパティオは『カスティリェーホ』のパティオを先例とし、また、恐らく14世紀後半に建設されたであろうアルハンブラの「コマーレスのパティオ」や「ライオンのパティオ」と類縁関係にあることは間違いない。二つの池を繋げて大きな池一つにすれば、「コマーレスのパティオ」になるだろうし、二つの池を小殿に置き換え、中央の噴水をライオン像で支えてやれば、「ライオンのパティオ」の構成が得られよう。

(続く)

- 1 ベネーヴォロ、レオナルド：『都市の世界史 1、古代』（佐野敬彦／林寛治訳）、相模書房、平成4年、pp.23, 96-97
- 2 Corominas, Joan: *Breve diccionario etimológico de la lengua castellana*, Madrid: Editorial Gredos, 1990 (3ª.ed.), p.444
- 3 "corrala", <http://es.wikipedia.org/wiki/Corrala> (2008-11-24検索)
- 4 Vázquez Consuegra, Guillermo: *Guía de arquitectura de Sevilla*, Sevilla: Junta de Andalucía, 1992
- 5 ブルックス、ジョン：『楽園のデザイン、イスラムの庭園文化』（神谷武夫訳）、鹿島出版会、1989、p.46
- 6 Torres Balbás, Leopoldo: "Arte Hispanomusulmán. Hasta la caída del califato de Córdoba" en *Historia de España V - España musulmana* (dirigida por Ramón Menéndez Pidal), Madrid: Espasa-Calpe, 1957, "Capítulo IV La ampliación de la Mezquita de Córdoba por Almanzor", pp.579-82 / Salcedo Hierro, Miguel: *La Mezquita Catedral de Córdoba*, Córdoba: Publicaciones de la Obra Social y Cultural de Cajasur, 2000, pp.147-49
- 7 前注 Torres Balbas-1957, Capítulo III, pp.423-63
- 8 Manzano Martos, Rafael: "Casas y palacios en la Sevilla almohade. Sus antecedentes hispánicos", en *Casas y Palacios de Al Andalus*, Madrid - Barcelona: Lunwerg Editores S.A., 1995, pp.315-52
- 9 Khansari, Mehdi; Moghtader, M. Reza, and Yavari, Ninouch: *The Persian*

Garden - Echoes of Paradise, Wachigton; Mage Publishers, 2004. ただしバルクワラー宮殿庭園の場合、1983年からのより現代的な発掘調査によると、四分庭園を推測できるような考古学的根拠は見つかっていないと言う（前注 Manzano-1995, p.321）。

- 10 注6の書 Torres Balbás- 1957, p.432
- 11 注8の書 Manzano Martos- 1995, p.323
- 12 注6の書 Torres Balbás- 1957, p.435
- 13 Gómez-Moreno, Manuel: *El arte árabe español hasta los almohades. Arte mozárabe* (Ars Hispaniae III), Madrid; Editorial Plus-Ultra, 1951, pp.69-73
- 14 注8の書 Manzano Martos- 1995, p.324
- 15 <http://www.cortesaragon.es/VVirtual/index.htm> (2009-1-20検索)
- 16 Abbad Rios, Francisco: *Catálogo monumental de España: Zaragoza*, Madrid; CSIC, 1957, pp.36-40 / Chueca Goitia, Fernando: *Historia de la arquitectura española, Edad Antigua y Edad Media*, Madrid; Dossat, 1965, pp.116-18
http://www.encyclopedia-aragonesa.com/voz.asp?voz_id=678 (2009-1-20 検索)
- 17 Navarro Palazon, Julio, y Jiménez Castillo, Pedro: "El Castillejo de Monteagudo: Qasr Ibn Sa'd", en *Casas y Palacios de Al Andalus*, Madrid - Barcelona; Lunwerg Editores S.A., 1995, pp.63-103
- 18 Torres Balbás, Leopoldo: "Monteagudo 《El Castillejo》", en la vega de Murcia", en *Obra dispersa I - Al Andalus*, Madrid; Instituto de España, 1981, pp.25-31 / en *Al-Andalus*, Madrid, 1934, pp.364-72 (28-36)
- 19 注13の書 Gómez-Moreno -1951、 pp.279-82
- 20 Torres Balbás, Leopoldo: "Patio de Crucero", en *Obra dispersa I - Al Andalus*, Madrid; Instituto de España, 1983, Vol.6, pp.300-23 / en *Al-Andalus*, Madrid, 1958, Vol.XXIII, pp.171-92 (29-50)
- 21 Daneshdoust: "Islamic gardens in Iran", in *Islamic Gardens, 2nd International Symposium on Protection and Restoration of Historical Gardens, organized by ICOMOS and IFLA, Granada, October 29th to November 4th, 1973*, Granada, 1976, pp.71-81
- 22 注5の書ブルックス-1989、 p.19

- 23 Pope, Arthur U. and Ackerman, Phyllis: *A Survey of Persian Art*, Oxford, 1939, p.1427 (Chueca, Fernando: "Rápidas consideraciones sobre los jardines-huertos en la España" in *Islamic Gardens, 2nd International Symposium on Protection and Restoration of Historical Gardens, organized by ICOMOS and IFLA, Granada, October 29th to November 4th, 1973*, Granada, 1976, pp.130, 137)
- 24 Navarro Palazon, Julio: "Actuación arqueológica en la Murcia del siglo XIII: Al-Qasr al-Sagir", *Casas y Palacios de Al Andalus, Siglos XII y XIII*, Madrid - Barcelona: Lunwerg Editores S.A., 1995, p.179 / "La Alhambra y la arquitectura castellana", *Ideal*, Granada, 8 febrero 2008、および Escuela de Estudios Arabes のHP, http://www.eea.csic.es/index.php?option=com_content&task=view&id=193&Itemid=47 (2008-11-24 検索)
- Puente Aparicio, Pablo: *Monasterio de Santa Clara la Real* (7 enero 2003), <http://www.fundacioncajamurcia.es/servlet/Satellite?cid=1148999699455&p-agenname=FundacionMurcia%2FC2043Proyecto%2FC2043TempProyectosA-mpliada2&idioma=ES&cssName=patrimonio/http://www.patrimur.com/archivos/memopatri6/pdfs/monasteriodesantaclaralareal.pdf> (2008-11-24検索)
- Instituto Cervantes: *El jardín andalusi* (Centro Virtual Cervantes, Actos culturales), http://cvc.cervantes.es/actcult/jardin_andalusi/ (2008-12-24 検索)
- 25 注20の書 Torres Balbás-1958, pp.183-86 (41-44)